
学園アリスの世界に転生

青桐悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園アリスの世界に転生

【Nコード】

N3620Z

【作者名】

青桐悠

【あらすじ】

語りてが学園アリスの世界に転生して色々する話。

1話 転生直後

目を覚ますと赤ん坊になっていた。

いくらテンプレ通りの台詞せりふが面白いとはいえ何回も同じことやってたらさすがに飽きるな。次からは別のにしよう。

考え込む俺を余所に周囲はテンプレどおりに進んでいく。

「名前は何にしようかしら」

「清見なんてどうだ。兄さんの娘は柚香ってつける予定らしいしちよつど良いだろう？」

「いい名前ね」

「清見、元気な子に育てよ」

どうやら名前は清見に決まったようだ。

もう一人の転生者は柚香って名前なのか。柚も清見も柑橘系の果物の名前で蜜柑の仲間だったな、てことは転生先はあの世界か。

考え事してたら眠くなってきた。寝るのも食うのも好きな俺としては食っちゃ寝できる赤ん坊の時期が一番好きだったりするので、睡魔に抗うことなくすぐさま眠りに落ちた。

2話 夢の中

目を開けたら学園アリスの佐倉蜜柑にそっくりな少女が俺の顔を覗き込んでいた。

「おはよう」

「おはよう。じゃ無くて、此処はどこ？ 私は誰？ じゃ無かった君は誰？」

「ここは夢の中で私は安積柚香。他に質問は？」

「安積ってことはやっぱ此処って学園アリスの世界？ 夢の中っていうのは何らかのアリスを使った？」

「そうだよ。私は夢使いのアリスなんだ。あなたは？」

「俺は安積清見。アリスは・・・石使いのアリスだな」

「今の間はいい？」

とりあえず神に殺されてから今までの経緯を簡単に説明した。

「以前、分析のスキルを手に入れてたからそれを使って調べたのにかかった時間。それよりこれからどうする」

「という？」

「アリスをもってることを隠して学園にかかわらないでいるか、そ

れとも積極的にかかわって原作介入しまくるか、はたまた別の選択肢を選ぶかどれにするかって話だ」

どれを選ぶにしろ俺は彼女に対する協力を惜しみはしない。

不幸な人と一緒にいるより幸せな人と一緒にいたほうが楽しいのだから。

3話 作戦会議

話し合いの結果。蜜柑の母親 安積柚香のことを伯母さん、行平泉のことを叔父さん、他の登場人物に関しては蜜柑と同じ呼び方で統一する事に決めた。原作介入についてはできる限り最大限引っ掻き回すことにした。

「柚香」

「何？」

「ちょっと実験したいことがあるんだけどいいか？」

「いいけど。何するの？」

「夢使いのアリスは魂を夢の中に連れて行くアリスだろ？ 今まで試した相手は全員目が覚めると同時に体に戻ったから、戻るからだの無い死者の魂を生者の夢の中に放置するとどうなるか試して見ないか？」

「おもしろそうだね」

「だろ？ 問題は誰で試すかだが・・・」

「蜜柑と叔父さんで試そうよ」

「ちなみに理由は？」

「もちろん。それが一番面白そうだから」

「なるほど、んじゃそれで決まりだな」

4話 佐倉蜜柑と接触

「今日は」

「え？ は？ え？」

柚香がにこやかに話しかけているのとは対照的に蜜柑は混乱したかのように意味のなさない単語を羅列している。

・・・いきなり目の前に自分と瓜二つの少女が現れたら誰だって混乱して当然か。

「はじめまして。俺は安積清見、こっちのお前にそっくりなのは安積柚香。お前は？」

「うちは佐倉蜜柑。あんた等は何でいきなり目の前に現れたん？」

「いきなり目の前に現れたわけじゃない」

「清見、それじゃ意味不明だって。もうちょっと判りやすく言おう」

「柚香は夢使いだ」

俺の説明に対して柚香は呆れたようなため息をついた。

「もういいわ。私は生まれたときから夢から夢へ移動することが出来るの。夢の中に入らずに夢を覗くこともできるけど夢に入らなければ存在に気付かれないの」

「解ったか？」

蜜柑はあまり理解できてないようだがそれでも考えて答えをひねり出した。

「つまり、柚香と清見はずっと目の前に立ってたけどうちが気づいてなかっただけってこと？」

「そういうことだ」

「夢の中を散歩してたら偶然、蜜柑ちゃんを見かけて、私にあんまりそっくりだから声をかけようと思ったんだけど夢の中に入るのを忘れてたから私たちの存在に気付いてもらえなくて・・・」

「夢の中に入っていないのが原因だから夢の中に入れば良いってことに気付いたけど蜜柑の目の前で夢の中に入ったらいきなり目の前に現れることになるという事には気付かなくてな」

「驚かせてゴメンね？」

「ううん。別に構わへんよ」

「柚香、そろそろ時間だから帰るぞ」

「え？ 今何時？」

「だいたい07:00ぐらいだな。てことで蜜柑、また明日」

「蜜柑ちゃん、またね」

5話 行き平泉と接触

伯父さんの夢の中を何食わぬ顔をして歩いていると柚香の存在に気づいた叔父さんが驚いて声を上げた。

「柚香！？　」

やっぱり間違えたか。柚香と伯母さんそっくりだもんな。

俺はあえて不思議そうな顔をしながら柚香に聞いた。

「柚香、知り合いか？」

「ううん。初めてあつた」

「人違いかな？」

俺たちの会話を聞いていた叔父さんが口を挟んだ。

「もしかしてお前は安積由香って名前じゃないか？」

「確かに私は安積柚香だけど・・・何で知ってるの？」

「俺は生前、アリス学園で教師をしていてその時の教え子の一人にそっくりなんだ」

「そういえば、お父さんには柚香って名前のお姉さんがいたって言うたね」

「つまり、柚香と伯母さんを見間違えたってことか」

「私と伯母さんってそんなに似てるのかな？ 世の中には同じ顔をした人間が3人入るって言うけど本等だね」

「蜜柑も柚香と瓜二つだモンな」

蜜柑の名前を出した瞬間、叔父さんの顔が劇的に変わった。

伯母さんが蜜柑を妊娠してるのがわかったのは伯父さんが死んだ後だもんな。死んで十年近くもたってから実は娘がいたって知ったら驚いて当然だ。

「伯父さん、蜜柑にも会ってみる？」

俺が言うが早いか柚香は伯父さんの手をつかんで歩き出した。

そっいえば伯父さんはこの状況を理解しているのだろうか？

6話 作戦実行

「よう、蜜柑。久しぶり」

俺は開口一番にそう言った。

「久しぶりって、昨日が初対面でしょ」

俺のボケに対して柚香が突っ込む。

「柚香、解ってないな。よく言うだろ？ 親友に時間は関係ないって」

「それは意味が違う」

もはや漫才になってしまった俺たちをよそに蜜柑とおじさんで話し出した。

「俺は行平泉。お前は？」

「うちは佐倉蜜柑」

「蜜柑は関西出身なのか？」

「うん、うち京都の田舎のほうに住んでんねん」

「さっき昨日が初対面って言ってたけど親戚じゃないのか？」

「ううん、昨日じいちゃん親戚があるか聞いたけどおらんって」

そろそろ起きる時間だな。実験内容を話すことにしよう。

「蜜柑、実は蜜柑の夢の中に伯父さんを連れてきたのには目的があるんだ」

「目的って何？」

「昨日、柚香は夢の中を移動できるって言ってただろう？ あれは魂だけ夢の中に移動させてるんだけど魂を夢の中に置き去りにしたらどうなるかって言う実験をこれからするんだ」

「魂を夢の中に置き去りにするって、つまり二度と起きられへんくなるってこと？」

「大丈夫。伯父さんはもう死んでるから起きなくても困ることは無いわ」

「んじゃ、おやすみ」

「お休みじゃなくてお早うだと思っよ」

7話 原作開始当日

伯父さんの魂を蜜柑の夢の中に放置してから2年半の月日が過ぎた。

「蜜柑ちゃん、何で怒ってるの？」

蜜柑は今日、怒りながら寝たのか夢が始まったときからずっと起きている。

おそらく今日が原作開始初日なのだろう・・・柚香は気づいてないのかあえて無視しているのか。そ知らぬ声で蜜柑に問いかける。

「聞いてよ柚香、あんな・・・」

予想通り原作1話目の内容を語る蜜柑と予想通りだといわんばかりの表情をする柚香。

・・・柚香って意外と演技はなのかも

「つまり、蜜柑ちゃんは蛍ちゃんが蜜柑ちゃんに黙って転校したことに對して怒っているのね」

「うん、蛍が転校すること知らんのうちだけやった」

「蛍ちゃんが転校することをいわなかったのは蜜柑ちゃんのことをどうでも良いと思ってるからだと考えてない？」

蜜柑は押し黙った。おそらく凶星なのだろう

「転校することを言われなかったのは蜜柑ちゃんがどうでどうでもいいんじゃない、むしろその逆だと思うよ」

「そもそも、転校なんて重大なことはどうでもいい奴よりもむしろ大事であればあるほど言い出し難いものだしな」

「だから、蛍ちゃんが蜜柑ちゃんに黙ってたのはどうでも良いからじゃなくて、むしろ大事だったからだと思うよ」

さつきから黙ってる伯父さんにも釘刺しとくか。

「伯父さん、さつきから黙ってるけど伯父さんもなんか言えよ」

「清見、よく見たら伯父さん蜜柑ちゃんの夢に干渉できてないや」

「というところ」

「つまり、蜜柑ちゃんに伯父さんの姿は見えてないし声も聞こえないってことだよ」

「何で？」

「伯父さんはアリスで蜜柑ちゃんの夢から出られないだけで夢使用ありすを使ってるわけじゃないから蜜柑ちゃんの夢に干渉できない。つまり、蜜柑ちゃんが考え事に集中したら伯父さんは夢からはじき出されるんだ」

「柚香アリスの夢使用でどうにかできないのか」

「蜜柑ちゃんと伯父さんの夢を操って1つにしたら伯父さんが夢からはじき出されることは無くなる・・・っとできた。これでよし」

伯父さんを素通りして向こう側を見ていた蜜柑の視線が伯父さんに留まった。

「これで寝てるときだけじゃなくて起きてる時も会話できるようになるよ。それと伯父さんと蜜柑ちゃんの体の主導権を入れ替えることも出来るようになったよ」

「何でもっと早くしなかったんだ？ 確か前やろうつて言ってたよな？」

「うつ・・・それは」

「今まで忘れてたな」

「そっそついえば蜜ちゃんもアリスだったんだね」

「蛭もつて、他にもアリスを知ってるん？」

「あれ？ 言ってなかった？ 私はもちろん清見と伯父さんもアリスだし、伯父さんなんか昔アリス学園の教師やってたって」

「そもそも夢使用^{アリス}を使わずにどうやって毎晩、蜜柑の夢の中に来てると思ってたんだ・・・って何も考えてなかったのか」

「・・・」

「清見、そろそろ起きようか」

図星を指されて落ち込んでる蜜柑を見かねた柚香が助け舟を出した。

どうせ5分とたたずに復活するから必要ないのに。

「じゃあな」

8話

「うち、今アリス学園に向かってんねん」

2話目突入か。半年って長いようで短かったな。

「蜜柑ちゃんアリス学園に向かってるって何で？ 入学するわけじゃないんだよね？」

柚香の演技力は日毎に増してる気がする。

「蛭に会いに行くんや」

「友達に会うために1人で京都から東京まで行くのか。立派だな」

「うち、東京まで1人で行ってるって清見にゆったっけ？」

「柚香の夢使いは入ってる夢の主が聞いている声を聞くことができるからな」

「清見は私のアリスストーン石を持ってるから蜜柑ちゃんを見た駅員の人が「女の子の1人旅なんて珍しいな」って行ってるのを聞いたの」

その時、もうじき東京に着くという放送が流れた。

「蜜柑、もうじき東京に着くぞ」

「そろそろ起きようか」

9 話

「蜜柑ちゃん、どうだった？ 蛍ちゃんには会えた？」

「うん、うちアリス学園に入学することになったねん」

「ほう、蜜柑はどんなアリスなんだ？」

「無効化のアリスや」

「名前から察するにアリスが効かないとかそこらへんか？」

「うん、そうやで」

「それで、どういう経緯で入学したの？」

「蛍に会おうとしてアリス学園の方向に向かってたら途中で詐欺師にあってな」

「えっアリス学園に入学するための塾がある！？」

原作でも思ったことだが、蜜柑ってかなりだまされやすいタイプだよな。将来詐欺とか似合わないか心配だ。

詐欺にだまされてついて行きそうな様子の蜜柑に耳元で伯父さんが囁いた。

「蜜柑、こいつらの行ってることは出鱈目だ。アリスは生まれつきのもので後から手に入れられるものじゃない」

「えっ、出鱈目なん？」

「出鱈目じゃないって、俺たちはちゃんと学園に認められて勧誘してんだって」

「蜜柑、ちょっと変わるぞ」

次の瞬間、伯父さんと蜜柑が入れ替わった。

蜜柑の体を借りた伯父さんが睨みつけると詐欺師たちは怖気づいたが、仲間たちがいる前で自分だけ逃げることが出来ないので精一杯の虚勢を張った。

「な、何眼つけてんだ。下手に出たらいい気になりやがって！ 野郎共、殺^やつちまえ！」

いつせいに殴りかかってきた詐欺師のこぶしを伯父さんがよけたその時。

「そこで何をしてるのかな？」

「そのあと鳴海先生が詐欺師を追っ払ってうちをアリス学園に入学させてくれたねん」

「何事もなく蛍ちゃんに会えてよかったね」

「何事もなくどころか問題ありまくりやった」

「へえ、何があっただ」

「変態工口狐にパンツ脱がされた」

10話

「何があっただ？」

「棗が学園の壁、破壊して鳴海先生はその対応に行ったからうちは部屋で待機になったんやけど」

バンッ

「鳴海ー！！温室から無断で鞭豆盗ったのお前かー！！」

よほど怒っているのかでかい音を立てて入って来た教師は蜜柑を見るなり謝った。

「すまん、人違いだ」

謝ると今度は静かに扉を閉めて出て行った。

「何やったんや。今の」

「あいつは植物作りのアリスを持ってるからな。杏樹がさっき使ってたむち豆のことで話が有ったんだろっ」

「あつ、そういえば鳴海先生のアリス聞くの忘れてた！」

「杏樹のアリスはフェロモン体質で使った相手を男女を問わず自分の虜にすることができる」

「お父さん鳴海先生と知り合いなん？」

「俺が生前、担任をした生徒の一人だ」

「へえ、じゃあお父さんのこと知ったら喜びはるやろか」

「俺のことは黙っててくれないか」

「良いけど何で？」

「それは・・・」

ヒュッ...

「え。」

「！？ 蜜柑！？」

棗にいきなり引つ張られて宙に浮く蜜柑。

「わ・・・！」

「5秒で答えろ。答えなかったら、この髪燃やす。お前何者だ。」

「.....っ」

「蜜柑、変わるぞ」

体の主導権を入れ替えたことにより雰囲気が一変する蜜柑。

「1？」

棗はいきなり蜜柑が殺気を放ったことに驚いて声も出ない。

このままこう着状態が続くかと思われたその時、ガシャンツと窓が割れ、誰かが飛び込んで来た。

「……てえ。」

「…遅かったじゃん。流架。」

「誰のせいだと思ってんだよ。棗」

助けに来てやったのにー、と体についたガラスの破片を払いながら言う。そこで初めて蜜柑に気づいたようだ。

「何してんの？ それ誰？」

「起きたらいた。しかも問い詰めたら殺気を放ちやがった」

バンツと扉が開き、ナル先生と岬先生が入ってくる。

「大丈夫！？ 蜜柑ちゃん！」

「棗っ、流架！！」

棗が離れた瞬間、わー！と先生に抱きつく蜜柑。よしよし、と頭を撫でていたら棗が窓から出ていこうとしていた。手には水玉模様のパンツを持っている。

「じゃあな”水玉パンツ”。」

「ううおお！ウチもうお嫁に行けへん」；

「パンツ脱がされたくらいしたことないって！。それに、その時は棗に責任とらせるから」

「いや、大したことだろう…」

「蜜柑ちゃん、はい。」

ナル先生がピラと二人の前に出したのは学園の制服。赤のチェック柄のスカート、黒と白のセーラー。

「これ制服。泣いてる顔は蜜柑ちゃんには似合わないよ。」

「その後無事に蛭にあうことができたねん」

「よかったね」

「クラスメイトとは仲良くできたか？」

「それが・・・」

11話

「あ、お前。さっきの水玉パンツじゃん」

「あ、あの時の…。ヘンタイちかん男ーっ！！　よくも女の子ウチにあんなことしておいて」

「女の敵っ、野蛮人っ。謝れバカ――！！」

蜜柑が棗に思いつきり突っかった瞬間。蜜柑の体が持ち上がった。

「おい転入生。棗さんに何調子こいた口聞いてんだ、コラ」

と言うのは、蜜柑をアリスで持ち上げてる少年。その左手は何かを掴む形になっている。

ドンッ

持ち上げられた状態から落下して地面に激突する蜜柑。

「何！？」

少年が再び手を動かすが蜜柑には何も起こらない。

「アリスが聞かない！？」

「おい、水玉。お前どついうアリス持ってたんだ」

棗が問いかけるが蜜柑は地面にたたきつけられた衝撃で咳き込むしかない。

「答える」

ようやく衝撃から立ち直った蜜柑だが、誰が言つかと言わんばかりにベツと舌をつきだす

「読めない。読心術が効かない」

心読みの台詞に教室内が騒然となった。

「何ですって！？ あんた何したの！？」

正田が驚いて叫ぶ

「そんなことよりこの変態工口狐。うちに謝れ！」

「夏目君に何てこと言っの！」

1人の生徒が蜜柑に殴りかかったことにより喧嘩に発展した。しかし蜜柑と伯父さんが入れ替わってるため、蜜柑の方が優勢になっている。

「おい、水玉。お前一週間以内にこのクラスになじめなかったら正式入学できないんだってな。お前はそのままだと確実に入学はムリだな。」

「……………」

「そこから見える北の森。北こを通って高等部に足跡を残してくることが出来たら蜜柑をアリスとして受け入れてやる」

「蜜柑はその条件飲んだのか」

「うまくいった？」

「うん、ベアとも仲良くなれたし。やってよかったと思う」

蜜柑とベアが仲良くなるのはもっと先のはずだが……

「何があつたの？」

「森でベアを見かけたときベアが可愛いから抱きつきに行ったら殴りかかってきて。お父さんにとっさに交代して防いだら喧嘩になつて、喧嘩してたら仲良くなつたねん」

なるほど。伯父さんを蜜柑に憑かせたことは話の進展を原作からかけ離すのに大きな影響を与えたようだな

12話 薬の副作用

1年ぶりに叔父さん柚香の父親が尋ねてきた。

「清見、久しぶり」

「叔父さん、久しぶり」

「今日はお土産に飴を持ってきたんだ後で柚香と食べると良いだろう」

「叔父さん、美味しそうな飴ちゃん買ってくれてありがとう」

俺は甘いものより塩辛いもののほうが好きなんだが。子供の振りというのも疲れる。

「お父さん、清見と上の部屋で遊んで来て良い？」

「良いよ。1年ぶりに会ったんだ。いっぱい遊んでおいで」

――
――
――
――
――

「子供の振りつても疲れるな」

「仕方ないよ。私達まだ3歳だもん」

「そうだな、とりあえず飴でも食つか。一個も食わないわけには行かないだろ？」

飴を口にする俺と清見、それが今後の人生に大きく影響するとも知らずに。

と、次の瞬間

柚香の姿が蜜柑と同じくらいの年齢になった。

じくっ

驚いた衝撃で飴を飲み込んでしまった。

「「10歳になった1？」」

しかもでかくなった影響で服が破れて二人とも半裸になっている。

「もしかして!？」

飴の袋を見ると＋7と書いてある

「ガリバー飴って飲み込んでも効果あったんだね」

「とりあえずこの半裸状態をどうにかしないといかな」

ハンターハンター
念を使つて服を作った。

「今のどうやったの？」

「以前HUNTER×HUNTERの世界に転生した時に覚えた念を使って作ったんだ。体のサイズに合わせて大きさが変わる機能が付いている」

「幸いこの部屋から外に出るときお父さんのいる部屋から見えないし元に戻るまで外で居ようか。この部屋だったら何時、誰が入ってくるか判らないし」

「そうしよう」

俺達は誰にも見られることなく玄関に到着した。

「無断で出かけると怪しまれるかもしれないな。一言声を掛けようか」

「そうだね」

俺は声を張り上げた

「ちょっと出かけてくるよ」

「気をつけて行ってらっしゃい」

「元に戻らない！？ 4時間もたったのに」

「もしかして・・・薬の副作用かもしれない」

「そついえば私達よーちゃんとおない歳だもんね」

「このまま帰るわけに行かないし。どうしようか」

「そつだ！」

ナルト ナルト
影分身と変化を使って30代くらいのおじさんを出す。

「何するの？」

「ついてくれば解る」

「この子達が全裸で公園に居たので近くの店で服を買って此处につれてきたんです」

俺達は今、警察署に居る。名目は全裸で公園に居た家で少年達の補導だ。

しかし、俺たちは一言も答えない。ずっと泣き続けている。

当然、嘔泣きだ。

「名前は？」

「君達は何で全裸で公園に居たのかな？ お父さんやお母さんは？」

「弱ったな。結局何も聞き出せないまま子供たちは寝ちゃうし、いたいこの子達はどこの誰なんだろう」

俺と柚香は今後の計画を立てるために夢の中で現実を見ながら作戦会議中である。

「どうする？」

「暇だし、蜜柑ちゃんのところ遊びに行こう」

13話

俺と清見が蜜柑の夢に行くと丁度ドッチボールをしている所だった。

「卑怯だぞ！ アリス使くなって自分で行ったくせに手前はアリスつかってんじゃねえか！」

「何言うてんねん。うちのアリスは無効化やからドッチボールで使っても意味ないし。第一、まだそんなにアリス使いこなされへんし」

「じゃあ何でさっきからアリスが使えないんだよ！」

「え？」

「何でやろう。うちは無効化使ってへんし、うち以外に向こう使える人があるんなら話は別やけど。調子でも悪いんやろうか？」

心読みが蜜柑の心を読んで言った台詞にクラスが騒然となった。

「心読みが読めたってことは間違いなく無効化使ってなかったってことだよな」

それを見た蜜柑が挑発する

「アリス使われへんくてそこまで焦るってことはアリス無しではうち等には勝たれへんって証明したも同然やな」

「なんだと？」

「上等だ！ 手前らなんかアリスを使うまでもねえ！ ぶっ潰してやる！」

「今日のところはもう引き分けだ。次は違う種目でリベンジだからな。」

ドッチボールはその後、特に変わったことは無く、原作通りに進んだ。

結局、蛍の怪我と暗躍が無くなったことが最大の違いだろう。

「ドッチボールしてる間、無効化使ってたの、伯父さんだよな」

「おう、昔暴走族やってた影響で卑怯なことしようとしてる奴は判るからな。アリス使おうとしたときだけ無効化使ったんだ」

俺たちは今、病院で手術中なので麻酔が効いて寝てるため蜜柑を強制睡眠させて会話している。

「蜜柑、俺たちアリス学園に入ることになった」

「えっ、ほんま？」

「本当だ」

蜜柑の姿が掻き消えた。直前に聞こえた「起きろ、星無し」という言葉から察するに授業中の居眠りに気づかれて叩き起こされたのだろう。

「そろそろ起きようか」

14話

起きたら鳴海先生の姿が有った。

「あ、おきた？」

「此处、どこ？ 俺達は何でこんなところにいるんだ？」

「ここはアリス学園。君たちはアリスになったからアリス学園に入学する事になったんだ」

柚香が会話に加わった。

「私達の服を着替えさせたのは先生ですか」

「君たちの服を着替えさせたのは学園の医者だよ。他に質問は無い？」

「無いよ」

「教室に案内してくれ」

俺と柚香が教室に入ると生徒の殆どが騒然となった。

「安積清見です。特技は手品です。俺の手品はたいてい種も仕掛け
ありません」

「安積柚香です。手品は主に清見のサポートをしています」

「蜜柑ちゃん、来てくれないかな」

「うん、いいよ」

蜜柑が来ると同時に手に隠し持っていたアリス^石ストーンを短刀の
形にする。当然見た目で判らないように色も変えてある。

「此処で取り出したるは2本の短刀」

短刀を2本とも投げて壁に突き刺す。

「切れ味は御覧のとおり」

柚香が蜜柑をぶん投げて短刀の上に乗つけると同時にコの字型に
変化したアリスストーンで蜜柑の四肢を拘束する。

「お次に・・・」

短刀が蜜柑の周囲の壁を一周して刺さるように投げる。

次に日本刀を作り出し、チョークの中に投げ四角く幾つかに切り
刻む。

「この切れ味拔群の日本刀を今から刃の付いた状態で飲みます」

言うが早いか日本刀を飲み込む柚香。

もっとも日本刀はアリスストーンを変化させた物だから体内に戻しているだけだが。

柚香は計30本の刀を飲み込んだ。

当然、手品は大成功で俺と柚香はあっさりクラスに馴染むことができた。

15話

この日、学園に激震が走った。

「確かに俺は聞いたんだ……アリス祭3日目のイベント祭で、そのメインゲストにアリス出身のハリウッドスターレオが予定されている事を！ しかも、そのレオがこの学園の付属病院に来るのだ！！」

「『『『『『ギャヒン！！』』』』」

学園アリスの世界に転生したつてのにレオの名前聞いたの転生してから今日が初めてだな。ほんとに有名か怪しいもんだ。

「清見。門で待ち伏せして蜜柑ちゃんが門を出るとき便乗して一緒に出よっか」

「そうだな、柚香。ちょっと耳を貸してくれないか」

「何で柚香と清美までついてきたん？」

「クラスメイトが誘拐されたって聞いたらついていくのは当然でしょ」

目の前には柚香が夢使いを使って操った人攫いがおいた鍵をかけ

てないバイクが有る。

「あれを使って追いかけないか」

蜜柑と伯父さんが入れ替わってバイクに乗った。柚香は蜜柑の後ろに乗り、俺はパーマをバイクの後ろに強引に乗せてからバイクを発進させた。

「ちょっと、あなたたちバイク乗れるの!？」

俺たちは質問には答えずに無言でバイクを進める。

しばらくすると原作と同じ位置でバイクを転倒され頭を打って気絶した。

16話

何かをかじる音がするので目が覚めれば、蜜柑がロープを齧っているところだった。

「パーマ、清見起きたで」

「蜜柑、通信機で蛭に連絡取れ」

「あ、」

蜜柑は言われるまで存在を忘れてたようで慌てて通信機のスイッチを入れた。

「ああ、蜜柑？」

あんたスイッチ入れるの遅いのよ。…何か外野が煩いから代わるわね。それよりアンタ大丈夫？」

「もしもし、蜜柑ちゃん？ 僕だけ聞こえる？」

分かることだけでいいから、状況を教えて貰いたいんだけど」

「どこかの港の倉庫で結界が張られとって、全員縛られてる。棗の具合が悪そうやねん」

「全員、危ないから今から黙って聞いて、こちらに状況が伝わるようにマイクのスイッチはオンにしておくんだ。その手足を縛る縄は自力で解くか、それが無理なら、夏目君に無理してもらって縄を燃やすんだ」

「無効化で結界を如何にかできないか？ 試すだけでもやらないよりはましだろ」

「わかった」

蜜柑が無効化を使うと同時に石^{アリス}使いを使ってナイフを作り、全員
の縄を切る。

「あと、確実に逃げられるように縛られたふりを続けるんだ」

「神野だ。聞こえるか、自分のアリスをなるべく敵に明かしちゃ行かんぞ。自分の手の内を見せるということは相手が対処してくるということだ。こちらに不利になるということになる」

「それと一番重要なこと。何があってもレオの声を聞いちゃいけない。もし聞いたら・・・」

そこで蜜柑の通信機がとられた。

「成程。通信機だったんだコレ」

やっぱ消しても揺らすのとあんま変わらないか。

「紫堂の結界揺らすなら兎も角、消すなんて黒猫じゃないな。誰がやった。むしろ何をした」

「玲生：お前なんで？ なんか」

「僕のほうこそアナタほどのひとが、なんで学園の犬なんかに収まってんですかー？ あなたはこっちの人だと思っていたのにな。先

輩の可愛い生徒勝手にお預かりしちゃってすみません。ま、預かったについてもお返しする日なんて来ませんけどね」

「玲っ」

ブツッ

通信機が切られた。

「知ってるかも知れないけど、僕のアリスは声フェロモンでね。組織では主にこのアリスは洗脳に使ってる」

「お前のアリスは？」

「わた・・・あ………体質・・・」

カランッ

棗が何かを投げてレオの気を逸らした。

「へえ、まだ反抗する力残ってたんだ。

お望み通りターゲット変更っと。

なるべくならお前は僕の声で無害にしてからボスに引き渡してやりたかったからね」

棗の顔を覗き込んで続ける

「どうせ学園に戻っても煙たい目で見られながら汚れ仕事だろう？それなら俺たちの仲間になるのと何が違う？」

「やめろっ」

蜜柑がレオを突き飛ばした。

「さつきから何勝手なことやってんねん。棗があんたらなんかの仲間になるか！」

「・・・おい、こいつ。レオさんの声聞いて、何で動けるんだ？」

「お前、まさか。無効化なのか？」

グイッ

蜜柑をレオが引つ張った。

「この顔……………似てなくもない。
あの女に」

イヤホンに向かって話しかける。

「今すぐデータを調べろ。あの女について10年程前を徹底的に洗いだせ。面白いことになりそうだ」

レオはどこかに立ち去る。

「おいパーマ。今なら結界緩いまだ。確か犬猫体質だな。直感と嗅覚のアリス利かせろ。この近くに何がある？」

「……………人気は無し。南方の…2つ先？の倉庫から大量の火薬と薬品の匂いがするわ」

「お前ら、俺が合図したら全力で入り口まで走れ。逃げるなら奴らの気がそれだ今だ」

「ちょ、何する気」

「走ったら絶対にとまるな、どっちかでもぶち逃げ切ったらどうにかしてこの場所を学園に伝えろ」

「あんた、走れる体とちゃうやん」

「行け！」

俺たちが走ると当然、追いかけてようと動き出すが、

「動くな！ 動くところの先にあるダイナマイトに火をつけるそうすれば此処なんて一瞬で火の海じゃね？」

「はあ？ 何を言っている。お前にこの結界の中そんな離れた所に火をつけることなんて」

「できる。何なら試すか」

そもそも結界消されたままだし。

「さっさと行け！」

俺たちは今度こそ走り出した。

17話

しばらく走っていると蜜柑が立ち止まり、

「皆、先行ってて」

「え？」

「うち、棗を見てくる」

もと来た道を引き返した。

「俺は蜜柑についていくから柚香とパーマは先に行け！」

俺は当然、それについていく

「今爆破すれば、吹っ飛ぶのは俺らだけ、無駄な努力にならずにすむ」

いざ棗が火をつけようとしたその時、

「棗、やめて」

蜜柑が棗を突き飛ばし、無効化で炎を消した。

「阿呆。何本気で火付けてんねん、あんた死ぬきか？ 目覚ませボケ」

「力を抜け」

レオが声アリスフェロモンを使った。

「蜜柑、素手と鉄パイプどっちがいい？」

蜜柑に聞くと見せかけて実際には伯父さんに問いかけている。

『蜜柑の体格から考えて鉄パイプを使ったほうが良いだろう』

意図は正確に伝わったようで伯父さんが答えた。蜜柑に石使用アリスで作ったアリスストーンを投げ渡すと、伯父さんと蜜柑が入れ替わる。

「蜜柑、応戦するぞ」

蜜柑は無言で鉄パイプを構える。伯父さん

俺達はなかなか善戦したがあまりに多勢に無勢、それに体格差が有りすぎた。

結局、蜜柑は原作と同じように壁にたたきつけられ、棗はアリスで火薬に引火させたのだった。

「棗は？ アイツ体へろへろのくせに力使って爆発を」

混乱した蜜柑が落ち着くまでまってから話しかける。

「棗は絶対安静で眠り続けてるけど命に別状は無い」

「蜜柑ちゃんは丸一日寝てて当分目を覚ましそつに無いから蛍ちゃんや皆が心配してるよ。しかもこの夢の状態だと、少なくとも後一日は目が覚めないよ」

「起きたら心配かけたことちゃんと謝れよ……って起きる直前に見た夢じゃないと忘れるか」

「そこらへんは夢使用^{アリス}を使って忘れないようにするから大丈夫」

蜜柑は目を覚ますとまず最初に謝った。

「心配かけてごめんな」

蛍は蜜柑の額に手をのせて言った。

「熱は無いようね。……もしかして偽者とか」

「その扱いは酷すぎるんじゃないかな」

「蜜柑があんなことがあった後で騒がない上に人に心配をかけたことに自力で気づくなんてありえないわ」

「いくらうちでも二日間目をさまさへんかったら心配かけるってことくらいわかるよ」

「自力で気づいてないだろ」

「・・・確かに清見に言われるまで気づかへんかったけど」

「とりあえず今回の軽はずみな行動に関しては学校に言ってから怖い先生の説教がまっています」

鳴海先生にとってもじんじん〃怖い先生なのか

「今回は君達の活躍で、大方の先生は君達に感謝しています。よって蜜柑ちゃん！」

「は、はいっ」

蜜柑は慌てて返事をする。

「シングル昇格…おめでとう」

鳴海は、蜜柑の手に星のバッジを1つ落とした。

「棗に見せびらかしてくる!-!」

そのまま病室を飛び出す。

「あ、蜜柑ちゃんっ！！ 棗は今、誘拐事件のせいで面会謝絶ッ！
！…って、聞いちゃいないね」

鳴海が慌てて止めたが、蜜柑はすでに廊下の角を曲がっていった。
しまった。

「ま、いつか」

18話

「来週から前期試験でーす」

「年に2回のこの試験の成績は、星階級審査や優等生賞レースに大きく関わってきますーす！ ゆ・え・に みんな頑張ってるね！」

「分かっているとは思いますが、学科試験なのでアリスの使用は厳禁。バレたら不正行為としてペナルティがあるから気を付けるよーに。ま、制御アイテムつけさせられるだろーし、大丈夫だろうけど」

「勿論、アリス以外の不正行為については言うに及ばず、だ。その時は……………分かってるな？」

それぞれ教師からの説明に、力なく返事する生徒。

『はーい……』

中でも蜜柑は、教師が去った後の教室で叫んでいた。

「うえーっ、試験！！ ウチ試験大きらいーっつっ！！」

「私もテストなんか嫌いだー！」

「まあ、馬鹿には辛い関門よね」

俺は周囲に聞こえないように小声で話しかける。

「柚香、今回ののは小学校のテストだって忘れてないか。勉強なら前世で大学レベルまで教えただろ」

「あ、そうだった」

「え、2人とも馬鹿なの？ どれくらい？ 俺より？」

「かなり…」

ウキウキで問いかけてくるキツネ目君に蛭が答える。

そこで委員長が慌ててフオローに入った。

「あつ、でも蜜柑ちゃん！ この試験頑張って上位とれば、クラスに1人優等生賞の候補になれるかもだよ？」

「「えー、ムリムリ」」

それに対し心読み君とキツネ目君が否定する。

「そついや家族との面会の権利を賞与されるらしいぞ」

「えっホンマ！？」

「これを見る」

俺が突き出したプリントには、めざましい活躍をした者には家族との面会の権利を賞与として…と書かれている。

「ウチつつ、今すぐ勉強頑張るつつ！！」

「柚香は頑張らないのか」

柚香は周囲には聞こえないように小声で答える

「私は会いたくなったらいつでも夢^{アリス}使いを使って会いにいけるもの」

19話

「えっとじゃあ、僕でよかつたら分かんない事とか何でも聞いてね」

さっそく委員長と、なぜか流架も巻き込んでの勉強会が始まった。

「全部分からない…」

「えーっと…」

「何で俺が…」

ぶつぶつ文句を言う流架。

その傍らでキツネ目君が心読み君に問いかけた。

「あれ、今井は一緒に勉強しないの？」

「うん。何か断られちゃったみたいだよ」

遡ること数分前。

『試験勉強って同レベルの人間とでないともあまり意味ないと思うのよね』

『……………』

『馬鹿ってうつりそうだし…』

相変わらずな扱いだが、蜜柑はくじけず柚香と一緒に学力チエツクにチャレンジする。

まずキツネ目君から。

「2と4分の1 + 6分の3は？」

「えーっと…」

「2ヶ12文の9」

続いて心読み君。

「【しけん】を漢字で書け」

「え………」

「試験」

最後に流架。

「1192つくるつ」

「……………っ」

「鎌倉幕府」

『……………』

「アホだっ！」

「こいつ本物のアホだっ！」

一瞬の間の後、一気に馬鹿にされる蜜柑。

最悪の結果で学力チェックは幕を閉じた。

それを見ていた棗や梓音の取り巻きが、棗に耳打ちする。

「また馬鹿共が流架君巻き込んで何かしてますね…。ヤキ入れますか」

「……………」

取り巻きの言葉に黙ったまま、冷やかな目で蜜柑を見つめる。

…と、蜜柑がその視線に気付いた。

スペシャルバカが何を今更…

どバカ

本家馬鹿

バカは一生何やってもバカなんだよ

目で様々なことを訴えられ、流架に泣きつく。

「そ…『そんな感じの目で見られた』…と言われても… 棗はそんなこと思ったりしないよ、多分…」

「伯父さん、生前アリス学園の教師だったんだろ？ 勉強教えてくれないか」

「いや、俺も勉強嫌いなんだ」

「それが教師の台詞か。仕方ない人は学ぶよりも教えるほうが覚えるって言うしな。朝までみっちり教え込んでやる」

「寝てる間にする勉強は効率が良いからいつもより覚えて楽しいよ」

「寝てる間以外ずっと勉強付けにしてやる」

それを聞いた柚香真っ青になり名がら言う。

「それって実質休憩時間ゼロってことじゃ…」

「楽しいお勉強時間の始まりだ」

・
・ 俺はにっこり笑いながら言う、当然真っ黒な笑みを浮かべながら・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3620z/>

学園アリスの世界に転生

2011年12月21日16時49分発行